
僕らの両端、西東。

ハク・シャロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの両端、西東。

【コード】

NO102H

【作者名】

ハク・シャロン

【あらすじ】

遅い青春です。不器用な恋と、中二病。

(前書き)

これまた独特。どうぞ、暇な時にでも。

ただ、春が少しだけ、遅かっただけなんだよね。ねえ、君。少しだけ、僕が弱かっただけなんだよね。

「それはありえない。」

そう君は言った。僕は、深く息を出した。タイミングは今しかない、と思ったんだ。今じゃなきゃって、思ったんだ。告白なんて、生まれて初めてだったから。君さえ良ければ、それはもう、確信した答えで。その答えが、君の都合が悪かっただけの話。おそらく、僕の顔は、上手くなかったな。

「アンタと付き合うなら、死んだほうがマシ。」

それは困る。君に死なれちゃ困る。ここ何年も、君を暖かく、そりやあ暖かく見守ってきたんだ。くるくると、長い髪を指に絡ませて、鬱陶しそうに、下を向く。その指になりたい。そんな欲求を抑えて、僕は走った。

君に死なれるのを恐れた僕の、とっておきのアイディア。僕の右手は西を、左手は東を。両手を合わせれば、僕はここに居る。

がたん、がたん。と、僕は線路の上。嗚呼、お母さん。莫大なお金は許して。近所の目も、気にしないでね。迷惑は承知の上だよ。君は大きく手招きして、どうしたの。今更、僕に戻ってきてほしいのかな。でも、これじゃあ格好が付かない。最後まで見ていて。

一度、本で読んだ事があるんだけど、電車に突っ込むのが、一番血が出る死に方らしい。君にまで、届くといいなあ。今、遮断機の向こう側にいる君に。

「ありがとう、僕と喋ってくれて。」

君の記憶に残れば本望なんだ。別にこれしか手段が無い訳じゃないけど。手っ取り早い。

振り向けば、遠くのほうから、鉄製の殺戮マシン。多くの人を乗せて、一人の上を通り過ぎようとしている。ライトで僕の目が眩ん

だ。前を向けば、君は膝立ち。春風で、一度だけ、ひらり君のパンツが見えた。かわいい。最後まで可愛いよ、君。

存分の後悔してよ、僕を振った君が悪いんだ。そう、見せ付けるように、僕は笑った。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。少しでも、暇つぶしになれば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102h/>

僕らの両端、西東。

2010年12月14日03時18分発行